

地方文芸雑誌『カンナ』にみる昭和 30 年代の鹿児島

鈴木優作

本稿は、昭和 28 年から平成 9 年まで 143 号に亘り刊行された鹿児島の地方文芸雑誌『カンナ』を対象に、昭和 30 年代を中心とした復興・発展期の地域表象を分析し、県史などマクロな視点からは見えづらい、当時の鹿児島の実相を明らかにすることを目的とする。同誌は昭和 40 年代に島尾敏雄・ミホ夫妻が寄稿する以前は注目を浴びてこなかったが、時代固有・地域固有の諸問題に関して文学的営為を通じて表現してきたと考えられる。同誌に表現された、戦時中・敗戦直後の回顧、戦後民主主義に対する理念と現実の葛藤、女性解放や経済力向上の未達成性、教育の革新と文学史の再編、本土と島嶼部の格差などといった、「高度経済成長」の一語で括られがちな単線的進歩史観に回収されえない、地域の民衆の潜在的な葛藤や願望を読み解く。